

第7回日本ユマニチュード学会総会 口頭発表内容報告

2025年9月27-28日 大会長 片山充哉（国立病院機構東京医療センター） 会場 国立病院機構東京医療センター

口頭発表 セッションA「施設への導入と継続」

座長/報告：北星学園大学 大島寿美子

セッションA『施設への導入と継続』		
A01 沼上 久美子	社会福祉法人こうほうえん ケアホームにしおおい こうほうえん	ユマニチュード®導入によるスタッフ意識とケアの質の変化 ― ケアホームにしおおいでの実践を通して
A02 竹内 雅代	かみいち総合病院	ユマニチュード®研修による職員の意識と患者満足度の変化
A03 櫻 さおり	社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院	ユマニチュード®浸透に向けた組織的支援の効果 ～病院全体での推進体制構築の実践報告～
A04 平 風音	京都大学医学部附属病院	ユマニチュード®評価保清表の導入によるケアの振り返りとスタッフの意識変化
A05 中村 亮太	特定医療法人 新生病院	短期集中かつ組織的なユマニチュード®の導入により職員のユマニチュード理解度・実践度が向上した事例
A06 石橋 小春	医療法人重喜会南福岡脳神経外科病院	ユマニチュード®ケアの再現性に必要な要素―チームブルーの挑戦―

セッションA「施設への導入と継続・事例」では、ユマニチュードの哲学とケア技術を組織全体に浸透させ、その効果を可視化する実践が報告された。「A01 ユマニチュード®導入によるスタッフ意識とケアの質の変化― ケアホーム西大井での実践を通して ―」では、導入によってスタッフが技術面や精神面の変化を実感し、やりがいや自己肯定感が向上し、チームワークが醸成され、ブロンズ認証取得に至ったことが報告された。「A02 ユマニチュード®研修による職員の意識と患者満足度の変化」では、全職員向けの研修により職員の意識と患者満足度の改善が

示された。「A03 ユマニチュード®浸透に向けた組織的支援の効果～病院全体での推進体制構築の実践報告～」では、病院長主導の推進委員会設立やBSC（戦略目標管理シート）への組み込みといった組織的支援により、職員の認知度や実践度、効果の実感が向上し、身体拘束率の低下が確認された。「A04 ユマニチュード®評価保清表の導入によるケアの振り返りとスタッフの意識変化」では、「評価保清表」により患者のADL（日常生活動作）の正確な評価や「座る・立つ」ケアを実践する意識が高まったことが報告された。「A05 短期集中かつ組織的なユマニチュード®の導入により職員の理解度・実践度が向上した事例」では、推進室を組織の上位に位置づけ、短期集中的な研修を実施したことで、認知度・理解度・実践度の向上が示された。「A06 ユマニチュード®ケアの再現性に必要な要素－チームブルーの挑戦－」では、実際のケアの場面でリーダーが技術を提案することで、技術が再現でき、技術の意味の理解が促進されたという事例が報告された。全体を通して印象に残ったのは「組織的な導入の重要性」と「スタッフの意識とケアの質の変化」である。会場は多くの立ち見が出るほど盛況であり、施設への導入事例や定着のための方法論への関心の高まりを実感した。

口頭発表 セッション B「教育」

座長/報告：関西医科大学 伊東美緒

15:30-16:30 セッション B『教育』		
B01 膽畑 敦子	修文大学看護学部	訪問看護師を対象としたユマニチュード®技術の学習による認知症高齢者とのコミュニケーションへの影響 ―質的分 析による学習効果の構造―
B02 金子 一明	市立大町総合病院	ユマニチュード®実践者育成 4日間研修による病棟のケアへの影響
B03 中山 和昭	かみいち総合病院	ユマニチュード®ケア技術を通した看護職の気づきと意識の変容 ～看護ケアの振り返りによるメッセージの明確化～
B04 横山 文子	足利大学 看護学部	分娩期ケア教育へのユマニチュード®応用の可能性―母親の安心感を高める支援ができる看護学生育成に向けて―
B05 宮下 知子	関西医科大学大学院 看護学研究科 博士前期課程 老年看護学領域	ユマニチュード®の包括的ケア技法演習による看護学生の介護施設実習での学び

教育セッションでは、訪問看護師、病棟看護師、看護学生へのユマニチュード教育の影響・効果に関する報告や、看護学生の分娩期ケア教育へのユマニチュード応用の可能性を理論的にまとめられた報告がありました。ユマニチュードの哲学および技術を学ぶことにより、実践に変化があったとする報告があっただけでなく、ユマニチュードを学んだ病棟と、学んだスタッフがいない病棟を比較した研究では、ユマニチュード群で、不穏時指示薬剤使用率および身体的拘束実施率が有意に低下するといった結果が報告されました。

ユマニチュードの学生や医療・介護従事者への教育について、質的・量的な検証アプローチで報告があり、さらにこれまであまりユマニチュードを活用されてこなかった分娩期ケアへの教育介入にユマニチュードを用いるという新たな視点があったことから、今後もさらに教育対象、教育領域、評価方法を広げてユマニチュードを展開する必要性があると感じました。

様々な分野で、様々な手法で、ユマニチュードに関する研究に取り組んでいただき、発表内容が広がることを期待しています。

口頭発表 セッション C 「ユマニチュード認証施設」

座長/報告：南福岡脳神経外科病院 安武澄夫

14:30-15:30	セッション C『ユマニチュード認証施設』	
C01 清水 克重	社会福祉法人平成会介護老人保健施設掬水	ユマニチュード®を実践することで変化した利用者の生活
C02 唐澤 香代子	社会福祉法人平成会介護老人保健施設わかな	ユマニチュード®ケア実現のために～ユニット風体制へ～
C03 伊藤 晃	社会福祉法人平成会介護老人福祉施設松風	入居者の目標達成に向けた、個別支援計画（ケアプラン）作成の工夫と効果
C04 田村 陽平	社会福祉法人平成会介護老人福祉施設福寿苑	開かれた施設であるために
C05 荒崎 香苗	社会福祉法人平成会介護老人福祉施設さわらび	認証への取り組みにおける成果報告～3方からの視点～

セッション C『ユマニチュード®認証施設』では、ブロンズ認証を受けた施設が発表。より良いケア・良い生活の場を形に表す、ユマニチュードの5原則の実践を中心に報告が行われた。

社会福祉法人平成会では、職種や施設の垣根を越え、法人を上げたユマニチュードケアの推進が行われている。

C01:介護老人保健施設掬水では、利用者の望む生活の場を目指し、入浴のマンツーマン対応、希望制のクラブ活動など、『仕組みの改変』を報告。良い人間関係が築けているからこそ、効果的なヒアリングが行え、改変へのヒントと利用者・職員の能動性に繋がった。

C02:介護老人保健施設わかなは、ユマニチュードの個別性を叶えるため、集団ケアからユニットケアへ大きく転換。多床室だからこそ生まれるケアの難しさを、職員と協議し共有することで、チームの行動変容とユニット体制化をもって、環境の課題を解消していた。

C03:介護老人福祉施設松風では、人生レベルのケアプランについて、事例を通じて発表。『孫の中学の最後のサッカー大会に応援に行く』という、明確な目標が示されることで、本人、職員・家族の正しいレベルのケア実践に繋がった。5原則の『意欲の生まれる場所』の実現には、叶えたい未来に向けたロードマップというケアプランの作成が進んでいる。

C04:介護老人福祉施設福寿苑でも 5 原則の『開かれた施設』を目指したユマニチュードケアが行われている。地域に昔から根付いている『お祭り』の参加を通じ、入居者と職員の心情変化に注目。『施設入所者』ではなく、『地域に暮らす一人』と存在するには、自らの意思で、社会に参加する視点が人生の豊かさに繋がっている。

C05:介護老人福祉施設さわらびは、利用者・職員・経営者のそれぞれの観点から、認証への取り組み成果を報告。集団ケアの脱却による利用者の生活の質が向上、職員の心理的余裕とやりがい Up、職員の定着による採用コスト削減と好循環が報告された。

5 原則の実現には、相手からのメッセージを見落とさず、自律性に繋げるケアが求められる。一個人ではなくチーム一丸となって、ケアのバトンを繋げる再現性と継続性が重要である。組織を挙げて推進している平成会からは、仕組み改変への挑戦と実装する組織力に、ユマニチュードの哲学と技術が加わった文化のある認証施設としての報告であった。

口頭発表 セッション D「施設への導入と継続・ユマニチュード認証施設・事例」

座長/報告 南福岡脳神経外科病院 杉本智波

15:30-16:30 セッション D「施設への導入と継続・ユマニチュード認証施設・事例」		
D01 木村 聡	順天堂大学医学部附属 順天堂医院	認知症患者の放射線検査における接遇改善の試み ―ユマニチュードの理念を取り入れた関わりの効果―
D02 佐伯 ひろみ	福岡県済生会福岡総合病院	患者さんを見守る体制の導入～ユマニチュードを実践して看護補助者との協働を推進する～
D03 末弘 千恵	グループホームふじの家瀬野	外国籍介護職員へのユマニチュード®導入における母語支援の実践と課題
D04 藤原 香子	社会医療法人三宝会 南港病院	高齢者グループホーム A におけるユマニチュード®ブロンズ認証再々審査への取組 ～入居者の BPSD の改善と介護職員の負担度の変化～
D05 河野 礼子	リハビリ型デイサービス リハサロン祖師谷	ユマニチュード®ケアによる意思決定支援と支援受容力の変化を検証する

さまざまな職種の方が発表されましたが、「知識をいかに実践につなげるのか。そのために必要なことはなにか」が共通したメッセージだったように思います。この Keyword をもとにセッション D を振り返ります。

D01. 実践したスタッフからは、効果を感じたという意見が多く継続的实践につながっている。一方で、未実践のスタッフは「照れ」や「理解不足」を理由としていた。これらのことから成功体験が継続的实践には重要な要素であると考えられる。

D02. 看護介護補助者が行う「見守り」の場面で、Humanitude の実践ができるためには、認知症看護認定看護師と共にラウンドした際の OJT が効果的であった。それによって実践することへの安心感が生まれ自発的な実践につながった。

D03. 外国籍介護職員が理念と技術とともに体現するためには、母語支援と実践機会の両立が重要で、特に哲学を理解することは重要であり、母国語支援を取り入れる意義は大きい。

D04 ブロンズ認証取得に向け、さまざまな取り組みを行っていく過程で、入居者の9名中4名にBPSDが認められ、スタッフの負担感が強くなり取り組みに対する負の感情が生まれ始めていた。そこで、職員が哲学・生活労働憲章・5原則を毎日唱和することで、哲学を意識した実践となり、入居者に選択を委ねることで、BPSD改善に寄与し、職員の負担度にもよい影響を与えた。

D05 認知症者とその家族による意思決定の場面を通して、発表者がHumanitudeケアを実践し、変化した認知症者の姿を見た介護者は、その技術を知りたいと思い、家庭での実践につながった。

以上の内容から、哲学の理解を基盤とし、実践を通して「技術は何のためにあるのか」を体感することが大切だと考えます。Humanitudeを共通言語としてデスカッションした時間は、大変有意義なものになりました。

口頭発表 セッション E 「事例・その他」

座長/報告 厚生連高岡病院 狩野 恵彦

11:30-12:15	セッション E『事例』	
E01 安藤 慧	医療法人重喜会南福岡脳神経外科病院	「立つ」経験が自己肯定感を育む ―ユマニチュード®を用いたリハビリテーション実践報告―
E02 佐藤 彩	市立大町総合病院 リハビリテーション科	認知症に伴う BPSD により、介助困難に陥った症例 ～ユマニチュード®実践における効果及び今後の課題～
E03 八代 純子	医療法人社団東山会調布東山病院	認知症高齢者に対するユマニチュード®技法の継続的実践がもたらす非薬物療法への期待
E04 荒谷 美波	富山県立中央病院	ケアに拒否がある認知症患者へのユマニチュード®の効果

セッション E では、ユマニチュード®を用いた認知症患者への実践事例が報告された。

E01 は、認知症の進行により廃用症候群を呈した高齢女性に対し、「立つ」経験を通して自己肯定感と意欲を回復させたリハビリ実践の報告であり、「立つ」ことの意味を再認識させる内容であった。

E02 では、大腿骨骨折術後に BPSD が強く介助困難であった症例に、ユマニチュード®の 4 つの柱を意識した関わりを導入した結果、トイレ動作時の介護抵抗が軽減し、介助量の減少や笑顔の増加につながった。

E03 は、多剤併用中のアルツハイマー型認知症患者にユマニチュード®技法を継続的に実践し、薬剤中止後も BPSD の出現なく穏やかに経過した事例を報告した。非薬物的介入としてのユマニチュード®の有効性を示唆する内容であった。

E04 では、ケア拒否の強い認知症患者に対し、本人の意思を尊重し自発性を引き出すケアを看護師間で共通認識をもって実践した。この取り組みが ADL の改善や患者－医療者間の信頼関係構築に寄与したことが示された。

口頭発表 セッション F 「事例・その他」 座長/報告 市立大町総合病院 内科／総合診療科 関口健二

12:15-13:00 セッション F『事例・その他』		
F01 安藤 夏子	医療法人社団東山会調布東山病院	高度急性期病棟における看護師によるユマニチュード®を用いたケアの効果と課題
F02 松井 貴子	足利大学 看護学部	ユマニチュード®の小児看護への導入
F03 篠原 信	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構	乳幼児育児へのユマニチュード®の応用
F04 香山 壮太	一般社団法人郡山医師会 郡山市医療介護病院	本人の意思の尊重と多職種で取り組みユマニチュード®の効果 ～看取り目的に入所した方の自宅退所に至る事例を通じて～

セッション F の 4 題は、対象も文脈も異なりながら、「人を能動的な主体として接し、その能動性が発現する条件をユマニチュード・ケアでつくる」ことへの可能性を示した。F01 は高度急性期での効果（看護観の再活性化、回復過程の支援）と課題（時間・安全文化・学習の風化）を質的に可視化した。F02 は小児領域への導入可能性を、小児患者の権利・発達段階・家族中心ケアの観点で理論的に検討した。F03 は乳幼児の自発行動を“待つ・予告・肯定”で引き出す実践として示し、ユマニチュードの軸である「能動性」の汎用性を提示した。F04 では、全職員がユマニチュードを学んだ医療介護病院でのケアにより、対象患者を看取り想定から在宅退所へと到達させたことから、関係性構築のための 3 つの柱（見る、触れる、話す）を用いたケアが提供されることで、患者の能動性が引き出され、ADL を改善させられる可能性を示した。これら 4 題に共通して、ユマニチュード・ケアを提供するための実装戦略が次の課題と考えられた。

口頭発表 セッション G 「事例」 座長/報告 市立大町総合病院 内科／総合診療科 金子 一明

11:30-12:15	セッション G 「事例」	
G01 岡本 佳奈	特別養護老人ホームふれあいの森	認知症の BPSD 症状に対する事例検討
G02 黒澤 優子	社会福祉法人平成会有料老人ホームせせらぎ	自己選択し、自分らしく生きていくことの大切さ
G03 川野 鈴香	医療法人博愛会 額田病院	食思低下のある患者へのユマニチュード®技法を用いた関わり
G04 山形 由依	社会医療法人三宝会 南港病院 リハビリテーション科	言語聴覚士と歯科衛生士の協働によるユマニチュード®ケア技法を用いた口腔ケア ～関係性の構築によるケアの受け入れがよくなった一事例～

ユマニチュード®技法を医療・介護現場に応用した 4 事例を検討した。いずれも高齢者の身体的・心理的抵抗や意欲低下に対して、「見る・話す・触れる・立つ」の 4 本柱に基づくケアを実践した結果、トイレ・入浴拒否や口腔ケアへの抵抗が軽減し、笑顔や意思表出が増加、ADL や栄養状態の改善を認めた。本人の同意を得たうえでチームで統一的ケアを行い、NPI スコアの改善や生活の質向上が確認された。個別性を尊重し、自己選択を支援するケアは本人の尊厳を守り、職員負担の軽減にも寄与した。ユマニチュード®は単なる技法でなく、共感に基づく関係性の構築を通じて、人としての存在を支える実践であることが示された。4 症例を通じてユマニチュード®の基盤にある高齢者の身体の生理学的な制限をユマニチュード®の技法を用いて解決したり、「自由と自律が大切にされる生活の場とする」といった生活労働憲章を実践するなど、各現場が自律的に創意工夫を重ね、良好な転機に結びついた症例であり、各現場に持ち帰られる内容であった。

口頭発表 セッション H 「事例」

座長/報告 安房地域医療センター 総合診療科 曾木 美佐

12:15-13:00 セッション H『事例』		
H01 吉田 亮太	社会福祉法人健成会 高齢者グループホームしらなみ	ユマニチュード®認証への取組みにより BPSD が改善した一事例 ～哲学・生活労働憲章・5 原則を理解し実践につなげる～
H02 松澤 秀徳	市立大町総合病院 リハビリテーション科	「立つ」の重要性を 再確認した一例 地域包括ケア病棟での支援について
H03 酒井 紫織	麻生リハビリ総合病院	アルツハイマー型認知症に脳出血を併発し経腸栄養だったが、多職種連携によるユマニチュード®ケアの実践で経口摂取可能となった事例
H04長谷川 恵		「排泄ケア」と手紙による「循環」への変化：当事者の貢献と、負のスパイラルからの脱却をめざして

セッション H では 4 つの事例の発表をしていただきました。

1 つ目は高齢者グループホームでの認知症の入居者の BTSD を改善させる取り組み、2 つ目は地域包括ケア病棟でのアルツハイマー型認知症患者の在宅看取りのための支援、3 つ目はリハビリテーション病院での脳出血後のアルツハイマー型認知症患者における経口摂取を再び可能にした取り組み、4 つ目はアルツハイマー型認知症の母と在宅介護をする娘との関係性の改善でした。どの事例も対象者は「高齢」「認知症」でしたが、その方の状態は様々であり、取り組みの目的や病院、介護施設そして在宅と「場」も異なっていました。しかし、全ての事例において、対象者の状態を正しく評価し、関係者全員が目的や目標の共通基盤をのものと、「人とは何か」「ケアする人とは何者か」というユマニチュードの哲学の観点から、どんな時も、そして最期の時を迎えるまで「自律と自立」を尊重するケアを実践していました。それぞれの事例の対象者の方々が幸せであっただけでなく、取り組みに参加した方々、「ケアする人々」、も喜びややりがいを実感されたのだと、発表を通して感じることができました。最後に、ユマニチュードが魔法ではなく普遍的な哲学に基づいた技法だからこそ、様々な対象者、ケアする人、場、そして目的にも適応できることを実際の事例の発表から知ることができ、改めてユマニチュードの無限の可能性に心が熱くなりました。